Ⅰ，質問項目に対する「因子分析」

本研究における質問項目の持つ意味合いや信頼性を向上させる分析方法として、各質問項目間における関連性を言葉の対で現象を引き起こしている原因（因子）を見つけ出す「因子分析」をまず行った。その結果、次の調査項目において因子が抽出された。そして、この因子をもとに調査項目をさらに分類し、Ⅱ，Ⅲ，Ⅳにおいて詳しい分析を行った。（質問方法が異なるため可能な質問項目のみ分析）

１，自然体験

２因子構造が認められ、第１因子に高い負荷量※を持った項目は「木登りをしたこと」「裸足で庭や外を歩いたこと」「トンボや蝉を手でつかんだこと」「友だちと秘密の場所を作って遊んだこと」などであり、その内容から「野外動的体験」と命名した。

第２因子に高い負荷量を持った項目は「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」「星空をじっくり見たこと」などであり、その内容から「野外静的体験」と命名した。

※負荷量＝質問項目が各因子間においてどのくらいの影響（負荷を与えているか）しているかを表す数値。以下同文

２，生活技能体験

１因子構造が認められ、すべての質問内容が一つの因子として抽出された。その内容は「リンゴの皮をむくこと」「生卵を割ること」「鉛筆でナイフで削ること」「ひもをリボン結びすること」であり、「生活技能体験」と命名した。

３，生死に関する体験

２因子構造が認められ、第１因子に高い負荷量を持った項目は「死んだ人の顔を見たこと」「お葬式に出席したこと」などであり、その内容から「人の生死体験」と命名した。

第２因子に高い負荷量を持った項目は「生き物が子どもや卵を産んだのを見たとき」「生き物が死んだのを実際に見たこと」などあり、その内容から「生物の生死体験」と命名した。

４，家庭での体験

本項目は質問内容相互で影響力があり、顕著に質問項目が分離しないために負荷量が低く、因子を抽出することができなかった。

５，人間関係

３因子構造が認められ、第１因子に高い負荷量を持った項目は「友だちの悩みを聞いたり相談相手になったりしたこと」「仲の良い友だちに相談したこと」「他人の失敗を笑ったりしないで励ましたこと」などであり、その内容から「相互励まし相談」と命名した。

第２因子に高い負荷量を持った項目は「周りの人に元気にあいさつをしたり話しかけたりしたこと」「お年寄りの方と話したり遊んだりしたこと」などであり、その内容から「挨拶声かけ」と命名した。

第３因子に高い負荷量を持った項目は「とっくみあいの喧嘩をしたこと」「仲間はずれにされた

こと」などであり、その内容から「仲間はずれ喧嘩」と命名した。

６，情緒体験

２因子構造が認められ、第１因子に高い負荷量を持った項目は「わくわくして夜も眠ることができなかったこと」「友だちに約束を破られて悲しかったこと」「先生や家の人からほめられて嬉しかったこと」などであり、その内容から「感情の揺れ」と命名した。

第２因子に高い負荷量を持った項目は「何かに取り組んで苦しかったけれど最後までやり抜いたこと」「ほしいものがあっても我慢したこと」などであり、その内容から「耐性」と命名した。

７，暮らしたいところ

本項目は質問内容相互で影響力があり、顕著に質問項目が分離しないために負荷量が低く、因子を抽出することができなかった。

８，文化体験

２因子構造が認められ、第１因子に高い負荷量を持った項目は「音楽のコンサートに行ったこと」「プラネタリウムに行ったこと」「ピアノを弾いたこと」「図書館で本を借りたこと」などであり、その内容から」「文化静的体験」と命名した。

第２因子に高い負荷量を持った項目は「子ども会や育成会の行事に参加したこと」「御神輿をかついだこと」などであり、その内容から「文化動的体験」と命名した。

９，将来の自己像（に対する自己評価）

２因子構造が認められ、第１因子に高い負荷量を持った項目は「苦しいことにも挑戦していける」「やりたいことは最後までがんばることができる」「困っている人がいたら助けることができる」「だれとでも仲良くする」などであり、その内容から「将来挑戦忍耐協調」と命名した。

第２因子に高い負荷量を持った項目は「自分の夢が叶う」「自分の好きな職業につける」などであり、その内容から「将来夢職業」と命名した。

10，休日の過ごし方

２因子構造が認められ、第１因子に高い負荷量を持った項目は「自分の家でテレビやビデオを見る」「自分の家でテレビゲームやコンピュータゲームをする」などであり、その内容から「休日室内」と命名した。

第２因子に高い負荷量を持った項目は「虫取りや魚釣りなど自然の中に出かける」「ボランティア活動をする」などであり、その内容から「休日屋外」と命名した。

11，休日の過ごし方

２因子構造が認められ、第１因子に高い負荷量を持った項目は「学校や家ではできない体験をもっとしてみたい」「公民館や児童館などでいろいろな行事があって楽しい」「もっと友だちと遊びたい」などであり、その内容から「休日充実」と命名した。

第２因子に高い負荷量を持った項目は「することがなくてつまらない」「一緒に過ごす家族の人がいなくてつまらない」などであり、その内容から「休日退屈」と命名した。

12，道徳観及び、生活習慣

さらに分析を深めるために、「何かに取り組んで、苦しかったけれど最後までやり抜いたこと」「ほしいものがあっても我慢したこと」「電車やバスで席を譲ったこと」「ボランティア活動をしたこと」などの質問内容から「道徳観」を「朝ごはんは食べていますか」「いつも何時頃に起きますか」「いつも何時頃に寝ますか」などの質問内容から「生活習慣」を作成した。

Ⅱ，自然体験・生活体験・人間関係（コミュニケーション）・文化体験・生活習慣・耐性・道徳観等に関する分析

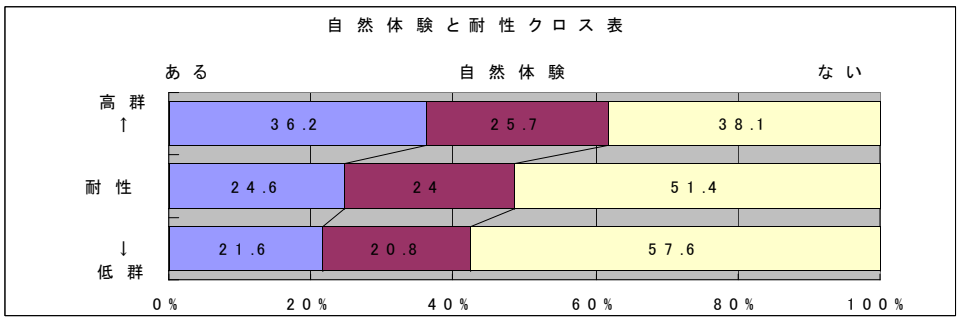
因子を活用し因子間の分散分析※及びクロス集計を行った。※分散分析（平均間の差を検定する方法。各群の平均の差を二乗し、３つ以上の平均値の相違を検定する方法）

１，自然体験に関する分析　（各因子を「高群（よくある）・中群（少しある）・低群（ない）」に分けた分散分析及びクロス集計）

○自然体験が豊富な子どもほど耐性力が充実

自然体験（野外動的体験・野外静的体験）と耐性因子を分散分析したところ、有意確率※ 0.00***で有意差が見られた。※統計的有意性の判定（有意確率）・・・.05<p<.10=*有意傾向である。p<.05=**（5%水準で）有意である。p<.01=***（1%水準で）有意である。数値が少ない方が有意性が高い。以下同文

自然体験と耐性は、自然体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、耐性が身についている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、動的体験の高群と低群には有意差（有意確率=0.00）が見られたものの、中群と低群には有意差（有意確率=0.66）が見られなかった。これに対し、静的体験は、すべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られた。ことから、自然体験の中でも動的体験は、少しの体験では耐性が身につきにくい傾向があることがわかった。また静的体験は、体験をすればするほど耐性が身につく傾向があることがわかった。

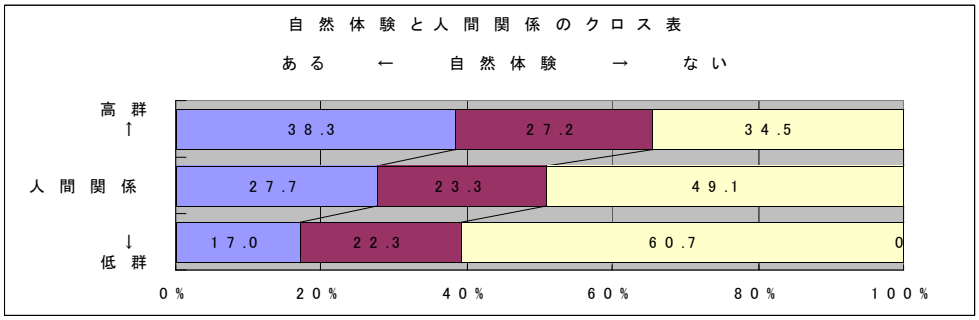


○自然体験が豊富な子どもほど人間関係（コミュニケーション能力）が充実

自然体験（野外動的体験・野外静的体験）と人間関係（相互励まし相談・挨拶声かけ・仲間はずれ喧嘩）因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

自然体験と人間関係は、自然体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、人間関係（コミュニケーション能力）が身についている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、各因子（相互励まし相談・挨拶声かけ・仲間はずれ喧嘩）ともに、高群・中群・低群すべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られた。ことから、自然体験をすればするほど人間関係（コミュニケーション能力）が身につく傾向があることがわかった。また、仲間

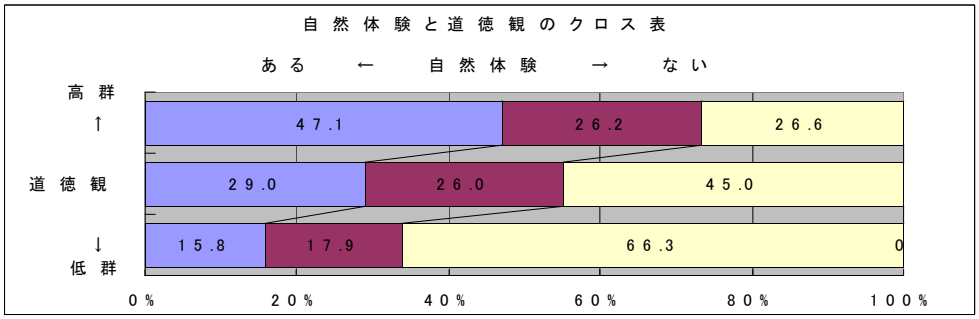
はずれ喧嘩因子については、自然体験が多いほど「喧嘩や仲間はずれ」も多いという傾向が分かった。このことは、自然体験において人との関わりを持つことにより、そこでの意見の違いなど、様々な問題に接する場面が多くなることが影響していると考えられる。



○自然体験が豊富な子どもほど道徳観が充実

自然体験（野外動的体験・野外静的体験）と道徳観因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

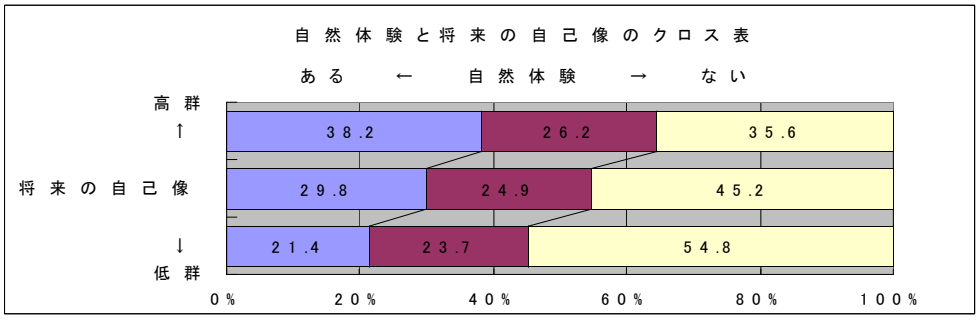
自然体験と道徳観は、自然体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、道徳観が身についている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、道徳観に対する高群・中群・低群すべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られた。ことから、自然体験をすればするほど道徳観が身につく傾向があることがわかった。



○自然体験が豊富な子どもほど将来の自己像（挑戦・希望）が充実

自然体験（野外動的体験・野外静的体験）と将来の自己像（挑戦忍耐協調・夢希望）因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

自然体験と将来の自己像は、自然体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、将来の自己像に対する挑戦意志や希望をもっている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、挑戦忍耐協調因子はすべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られた。一方夢希望因子は、高群と低群には有意差（有意確率=0.00）が見られたものの、中群と低　群には有意差（有意確率=0.11）



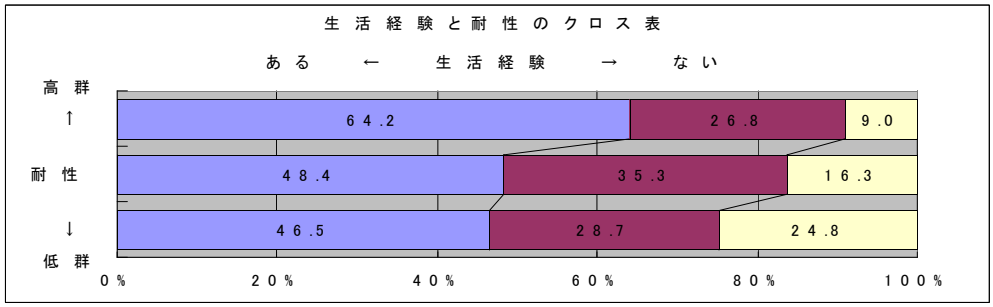
が見られなかった。ことから、将来の自己像の中でも夢希望は、少しの自然体験では夢や希望をもちにくい傾向があることがわかった。また挑戦忍耐協調は、自然体験をすればするほど、将来の自己に対して挑戦意志が高くなる傾向があることがわかった。

２，生活体験に関する分析　（各因子を「高群（よくある）・中群（少しある）・低群（ない）」に分けた分散分析及びクロス集計）

○生活技能体験が豊富な子どもほど耐性力が充実

生活技能体験と耐性因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

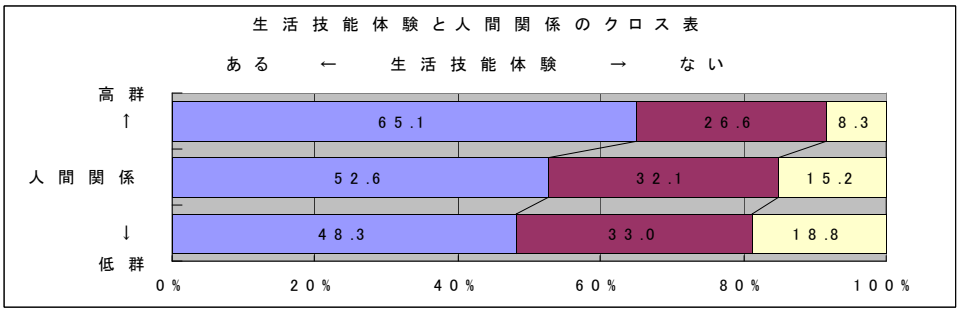
生活技能体験と耐性は、生活技能体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、耐性が身についている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、すべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られ、生活技能体験をすればするほど耐性が身につく傾向があることがわかった。



○生活技能体験が豊富な子どもほど人間関係（コミュニケーション能力）が充実
人間関係（仲間はずれ喧嘩）は、有意差なし

生活体験と人間関係（相互励まし相談・挨拶声かけ）因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。人間関係（仲間はずれ喧嘩）因子は、有意確率 0.16 で有意差が見られなかった。

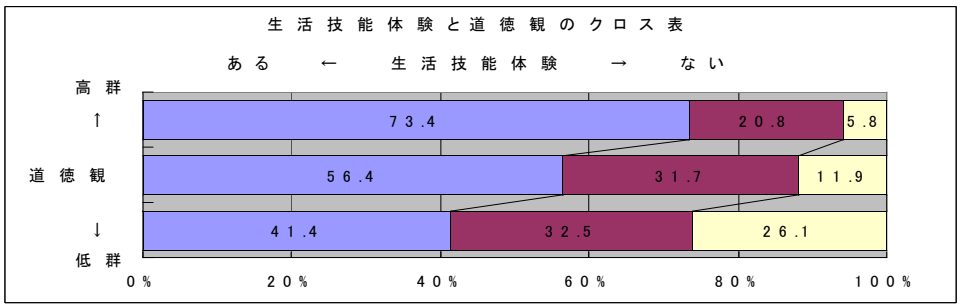
生活技能体験と人間関係は、生活技能体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、人間関係（コミュニケーション能力）が身についている傾向があることが分かった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、相互励まし相談・挨拶声かけ因子ともに、高群・中群・低群すべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られた。このことから、生活技能体験をすればするほど人間関係（コミュニケーション相互励まし相談・挨拶声かけ能力）が身につく傾向があることがわかった。また、生活技能体験の有無と喧嘩や仲間はずれは、あまり関係をしていない傾向にあると考えられる。



○生活技能体験が豊富な子どもほど道徳観が充実

生活技能体験と道徳観因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

生活技能体験と道徳観は、生活技能体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、道徳観が身についている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、道徳観に対する高群・中群・低群すべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られた。ことから、生活技能体験をすればするほど道徳観が身につく傾向があることが分かった。



○生活技能体験と将来の自己像（挑戦・希望）は有意差なし

生活技能体験と将来の自己像（挑戦忍耐協調・夢希望）因子を分散分析（有意確率 0.68）及びクロス集計（有意確率 0.213）したところ有意差が見られなかった。

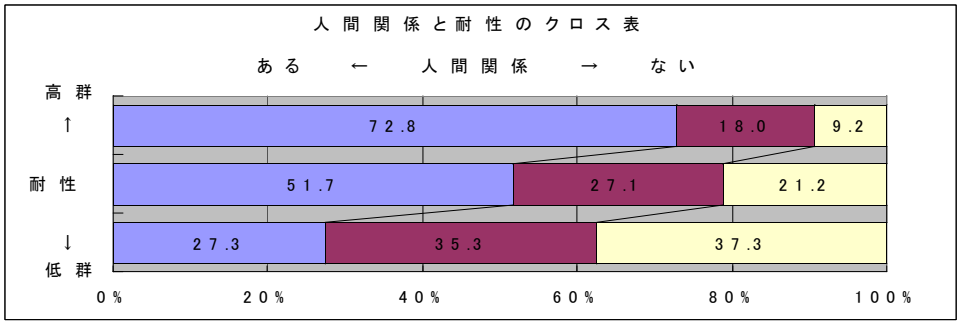
生活技能体験と将来の自己像は､生活技能体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、有意な差は見られなかったことから、あまり関係をしていない傾向にあると考えられる。

3，人間関係に関する分析　（各因子を「高群（よくある）・中群（少しある）・低群（ない）」に分けた分散分析及びクロス集計）

○人間関係体験が豊富な子どもほど耐性力が充実

人間関係体験と耐性因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

人間関係体験と耐性は、人間関係体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、耐性が身についている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、すべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られ、人間関係体験をすればするほど耐性が身につく傾向があることがわかった。

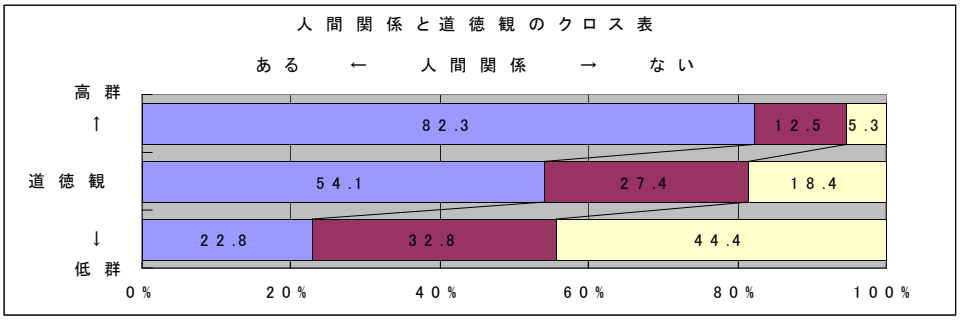


○人間関係体験が豊富な子どもほど道徳観が充実

人間関係体験と道徳観因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

人間関係体験と道徳観は、人間関係体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、道徳

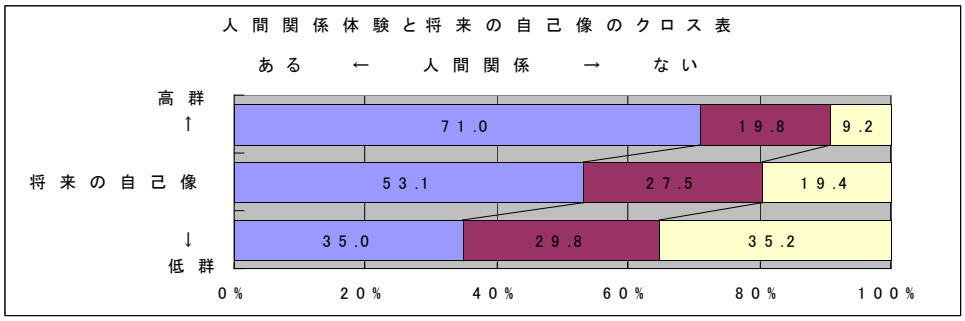
観が身についている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、道徳観に対する高群・中群・低群すべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られた。ことから、人間関係体験をすればするほど道徳観が身につく傾向があることがわかった。



○人間関係体験が豊富な子どもほど将来の自己像（挑戦・希望）が充実

自然体験（野外動的体験・野外静的体験）と将来の自己像（挑戦忍耐協調・夢希望）因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

人間関係体験と将来の自己像は、人間関係体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、将来の自己像に対する挑戦意志や希望をもっている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、挑戦忍耐協調・夢希望因子ともにすべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られた。このことから人間関係体験をすればするほど、将来の自己に対して挑戦意志や、夢や希望をもつ傾向があることがわかった。

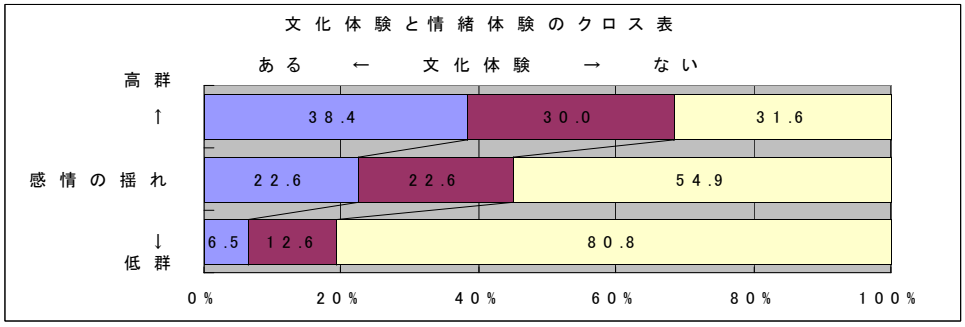


4，文化体験に関する分析　（各因子を「高群（よくある）・中群（少しある）・低群（ない）」に分けた分散分析及びクロス集計）

○文化体験が豊富な子どもほど感情の揺れが多い（情緒が豊かである）

文化体験（文化動的体験・文化静的体験）と感情の揺れ因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

文化体験と情緒体験は、文化体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、感情の揺れが多い傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、文化動的体験・文化静的

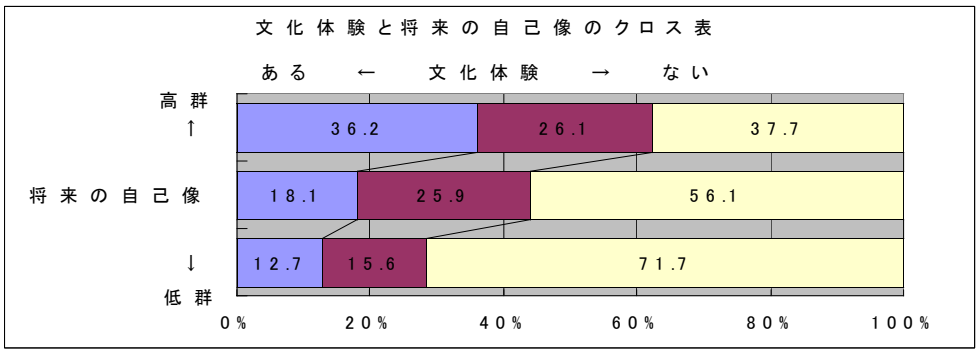


因子ともにすべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られた。このことから文化体験をすればするほど、情緒豊かな感情をもつ傾向があることがわかった。

○文化体験が豊富な子どもほど将来の自己像（挑戦・希望）が充実

文化体験（文化動的体験・文化静的体験）と将来の自己像因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

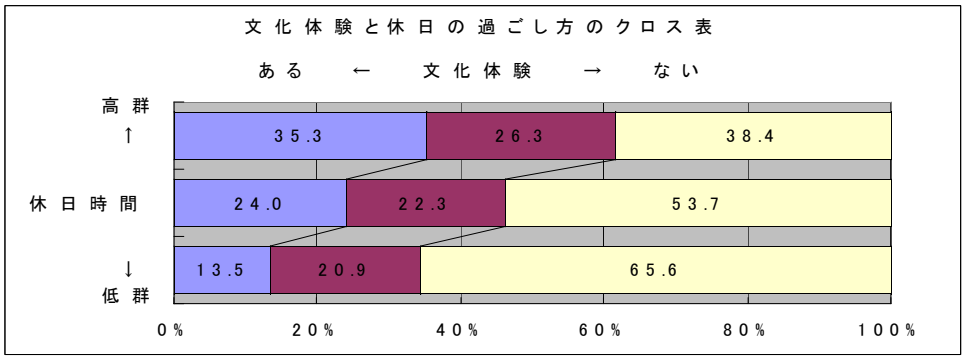
文化体験と将来の自己像は、文化体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、将来の自己像に対する挑戦意志や希望をもっている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、文化動的体験・文化静的因子ともにすべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られた。このことから文化体験体験をすればするほど、将来の自己に対して挑戦意志や、夢や希望をもつ傾向があることがわかった。



○文化体験が豊富な子どもほど休日の過ごし方（休日充実群）が充実。

文化体験（文化動的体験・文化静的体験）と休日の過ごし方「休日充実」因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

文化体験と休日の過ごし方（休日充実）は、文化体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、休日の過ごし方が充実している子どもたちは、文化体験が充実している傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、文化動的体験・文化静的体験因子ともにすべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られた。このことから文化体験体験をすればするほど、休日に学校や家ではできない体験をもっとしてみたい気持ちや、休日の時間がもっとほしいという傾向があることがわかった。



○文化体験と休日の過ごし方（休日退屈群）は、有意差なし（自然体験も同じく、休日退屈群は有意差なし）

文化体験（文化動的体験・文化静的体験）と休日の過ごし方「休日退屈」因子を分散分析（有

意確率=0.924）及びクロス集計（有意確率=0.278）したところ有意差が見られなかった。

文化体験と休日の過ごし方（休日退屈）は、文化体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、有意差が見られなかった。これは、休日充実群が文化体験に有意差があるのと比較すると、休日が退屈と思っている子どもは、文化体験そのものに価値を見いださず、文化体験行動を起こしていないと考えられる。さらに、自然体験と休日の過ごし方を分散分析した結果、文化体験と同じ傾向であることがわかった。従って、休日退屈群の子どもたちに、文化体験や自然体験の良さを味わわせることにより、文化体験や自然体験の価値を見いだし、充実した休日を少しでも味わうことができるのではないかと考える。

5，生活習慣に関する分析　（各因子を高群※・中群※・低群※）」に分けた分散分析及びクロス集計）

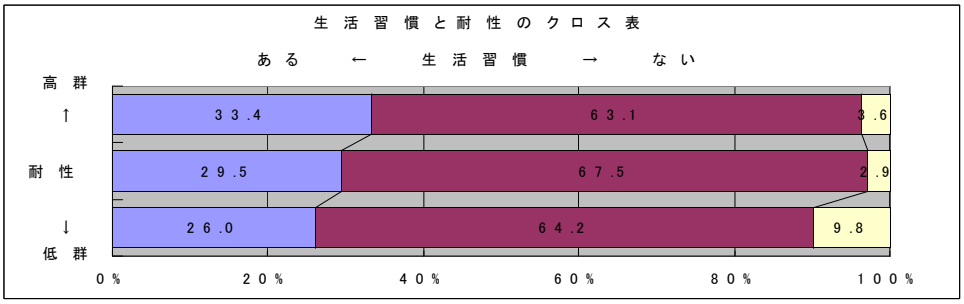
※高群（起床＝6時頃までに・就寝＝小学生21頃までに、中学生22時頃までに）・中群（起床＝7時頃までに就寝＝小学生22時頃までに、中学生23時頃までに）・低群（起床＝8時頃までに・就寝＝小学生22時以降、中学生0時以降）及び朝食の取り方も含めた群である。

○生活習慣が好ましい子どもほど耐性力が充実

生活習慣と耐性因子を分散分析においては、有意差が見られなかったが、クロス集計したたところ、（カイ二乗検定※、有意確率 0.02**）で有意差が見られた。※「観察された事象の相対的頻度がある頻度分布に従う」という帰無仮説を検定するもので、各頻度の観測値と理論値の差を二乗し、各頻度の理論値で割って合計したもの。

生活習慣と耐性は、生活技能体験が豊富な子どもはそうでない子どもと比較して、耐性が身についている傾向があることがわかった。

生活リズムと耐性は、生活習慣が好ましい子どもはそうでない子どもと比較して、耐性が身についている傾向があることがわかった。さらに詳しく分析すると、早寝・早起き・朝食を食べることに対して高群の子どもたちほど、耐性が身につく傾向があることがわかった。これは、家庭内の規律（しつけ）が保たれていることが影響していると考えられるが、今回の調査では判断がつかない。

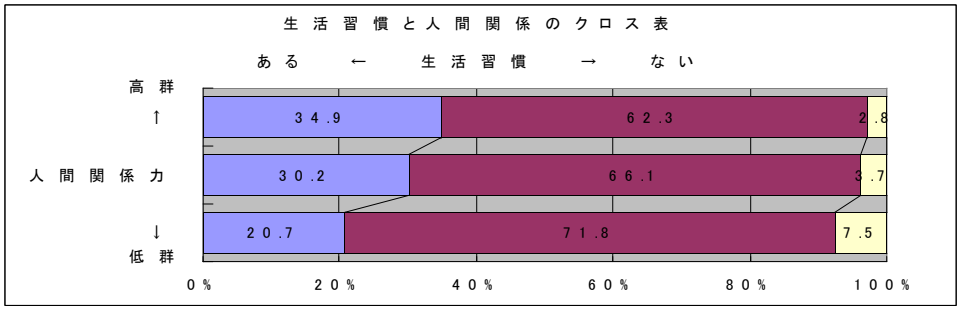


○生活習慣が好ましい子どもほど人間関係（相互励まし相談・挨拶声かけ）が充実人間関係（喧嘩仲間はずれ）は増加

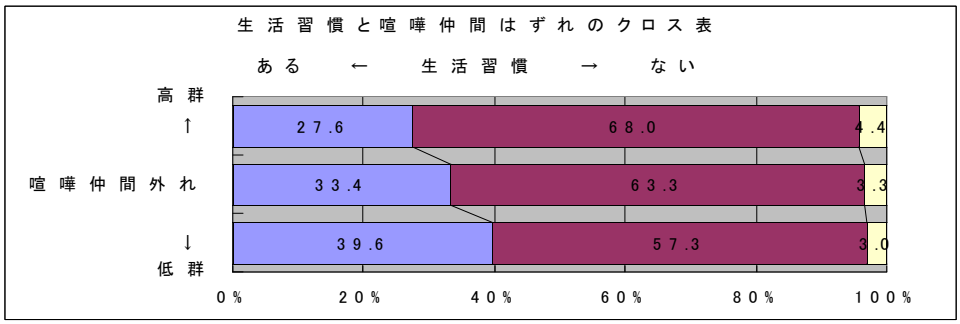
生活習慣と人間関係（相互励まし相談・挨拶声かけ・仲間はずれ喧嘩）因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

生活習慣と人間関係は、生活習慣が好ましい子どもはそうでない子どもと比較して、人間関係

（コミュニケーション能力）が身についている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、相互励まし相談因子は、高群と低群（有意確率=0.00）及び中群と低群（有意確率=0.02）に有意差が見られたものの、高群と中群には有意差（有意確率=0.126）が見られなかった。挨拶声かけ因子は、高群・中群・低群すべての群間に有意差（有意確率=0.00）が見られ、仲間はずれ喧嘩因子は、高群と中群は（有意確率=0.00）に有意差が見られたものの、中群と低群には有意差（有意確率=0.716）が見られなかった。このことから、相互に励ましたり相談にのったりする能力は、生活習慣が通常(中群)以上であれば身についている傾向にあり、挨拶や声をかけたりする能力は、生活習慣が好ましくなればなるほど身についている傾向にあるといえる。



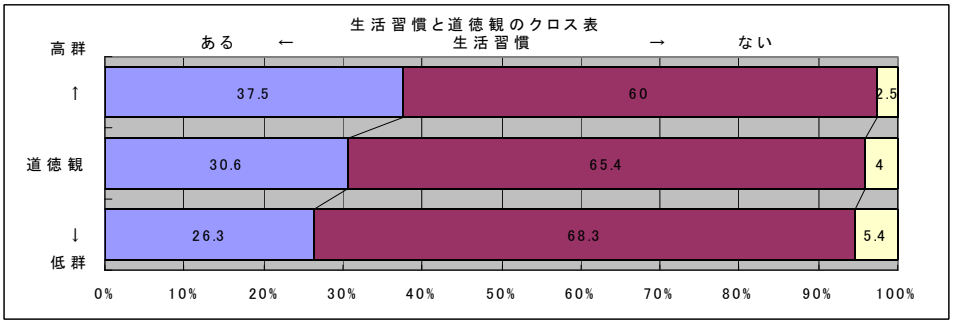
また、仲間はずれや喧嘩の体験は、生活習慣がとても好ましい子ども(高群)はそうでない子ども(低群)と比較して、喧嘩や仲間はずれになることが多い傾向にあることがわかった。これは、テレビや芸能情報、ゲームなどの話題に入ることができにくいからではないかと考えるが、今回の調査では判断がつかない。



○生活習慣が好ましい子どもほど道徳観が充実

生活習慣と道徳観因子を分散分析したところ、有意確率 0.00***で有意差が見られた。

生活習慣と道徳観は、生活習慣が好ましい子どもはそうでない子どもと比較して、道徳観が身についている傾向があることがわかった。さらに詳しく分散分析及びクロス集計すると、高群と低群は（有意確率=0.00）に有意差が見られたものの、中群と低群には有意差（有意確率=0.357）が見られなかった。このことから、生活習慣がとても好ましい子どもほど、道徳観が身についている傾向にあることがわかった。これは、家庭内の規律(しつけ)や約束を守れていることが影響していると考えられるが、家庭での様子と学校や社会での様子が同じであるとは限らないので、今回の調査では判断がつかない。



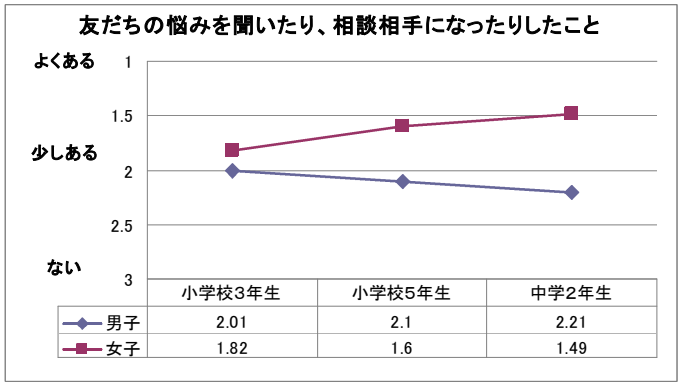
Ⅲ，学年及び男女の違いによる生活体験に関する分析

因子を活用し因子間のＴ検定を行った。※Ｔ検定(二つの平均間の相関を検定する方法)

学年の違いによる子どもたちの生活実態の変化や男女間でどのような違いがあるかについて分析した。

１．「友だちの悩みを聞いたり、相談相手になったりする」のは、男子よりも女子の方が多く、学年が上がるにつれて、その差は開く。

小学校３年生、小学校５年生、中学２年生のいずれにおいても、男女間に有意差はあり、男子よりも女子の方が友だちの悩みを聞いたり、相談相手になったりする傾向が高いといえる。学年が上がるにつれて、男女間の差は大きく開く結果となった。

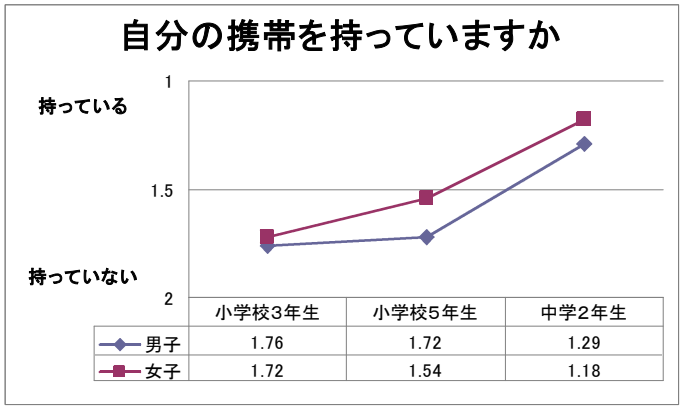


※　数値は平均値

２．子どもが自分の携帯電話を持つのは、小学校５年生を境に増加傾向にある。

「自分の携帯を持っていますか」という質問項目では、小学校５年生と中学校２年生の男女間で有意差が見られたが、小学校３年生では有意差はなかった。

また、携帯電話の所有率を見ると、男子は小学校３年生と５年生でほぼ横ばいであるが、女子は小学校５年生では、携帯電話を持つ子どもが著しく増加している。

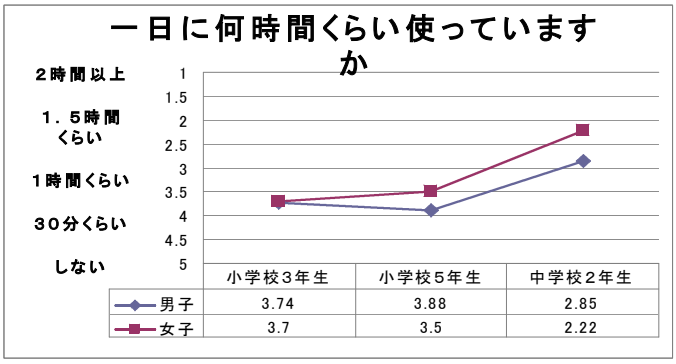


※　数値は平均値

３．携帯電話の利用時間は、男子よりも女子の方が長い。

小学校５年生と中学校２年生において、携帯電話の利用時間で男女間に有意差が見られた。

中学校２年生では、男女とも利用時間は１時間を超し、非常に長い時間、携帯電話を利用しているという結果となった。

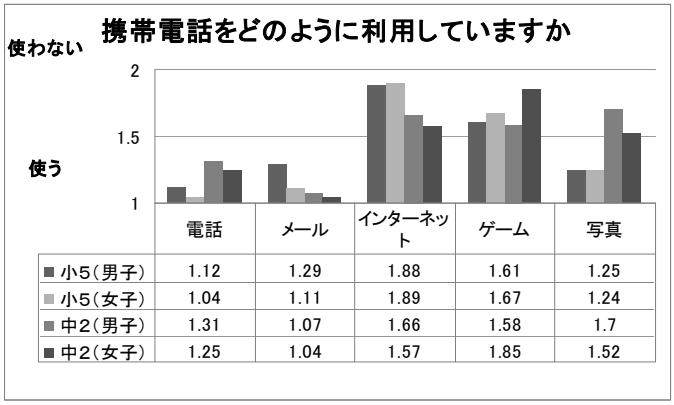


※　数値は平均値

４．携帯電話の使用はメールが中心である。

右の表は、小学校５年生と中学校２年生において、携帯電話をどのように利用しているかを表したものである。

どちらの学年とも、インターネットやゲームは利用せず、電話やメールを中心に使っている。小学校５年生では、メールよりも電話を多く利用する傾向にあるが、中学校２年生になると、平均値は逆転する。



※　数値は平均値

電話とメールの使用においては、小学校５年生では男女間において有意差が見られたが、中学校２年生では、男女間の有意差は見られなかった。

子どもたちは自分の気持ちを伝えるときは、直接話すより、メールの方が多くなる傾向にある。

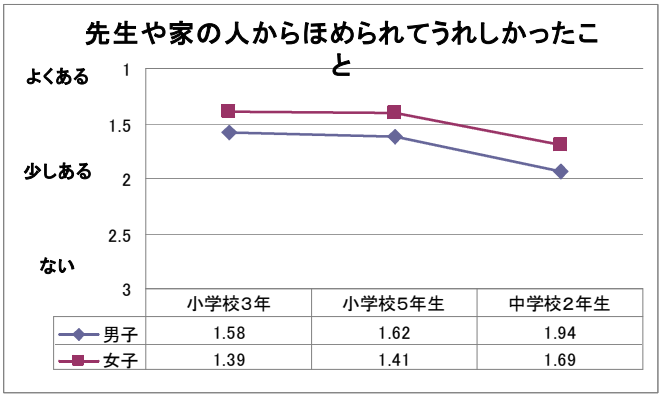
携帯電話をもつ子どもは、学年が上がるにつれて増加傾向にある。特にメールでの使用頻度が高くなる傾向があることが明らかになった。利用時間も、中学校２年生では１時間以上にもなる。

友だち同士、直接話をしたり、手紙を直接交換したりするのではなく、携帯電話を用いて、自分の気持ちや悩み事を文字にして送ることが、時代が流れるにつれて多くなっているのではないだろうか。

５．女子と比べて、男子の方が「ほめられてうれしかった」という経験が少ないと感じている。

小学校３年生、５年生、中学校２年生のどの学年においても、男女間で有意差は見られた。詳しく分析すると、男子の方が女子に比べ、「ほめられてうれしかった」という経験が少ないと感じている。

また、小学校３年生と５年生では、ほぼ横ばいで変化は少ないが、中学校２年生では、平均値は上がり、「ほめられてうれしかった」という経験はやや減少する。



※　数値は平均値

「３つほめて１つ叱れ」と言われているが、教師や家族からほめられてうれしかったと感じた経験がある子どもが意外と少ないということがわかった。実際ほめていても、ほめられているとは感じていない子どももいるかもしれない。

６．土・日曜日の過ごし方は、男子はスポーツをし、女子は映画や買い物に町中へ出かける。

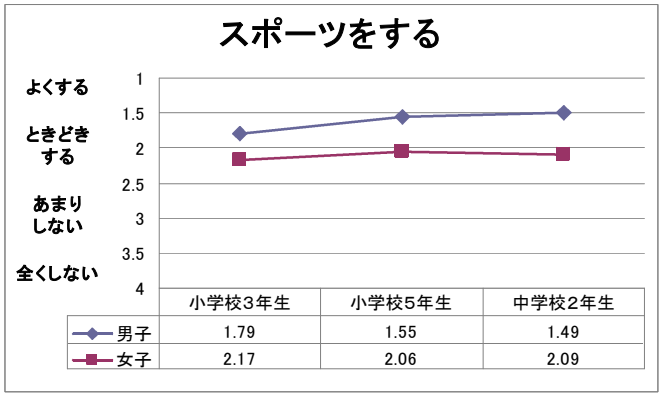
土・日曜日に子どもたちは、どのように過ごしているのだろうか。

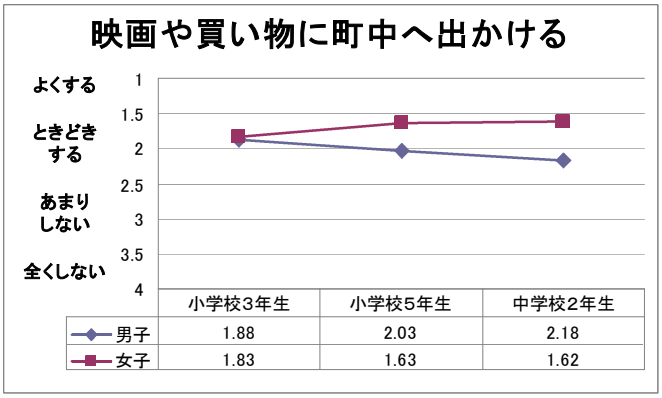
「スポーツをする」ことは、小学校３年生、小学校５年生、中学校２年生のいずれの学年でも、男女間に有意差があった。
したがって、どの学年でも土・日曜日には、女子に比べ男子の方がスポーツをするということがいえる。

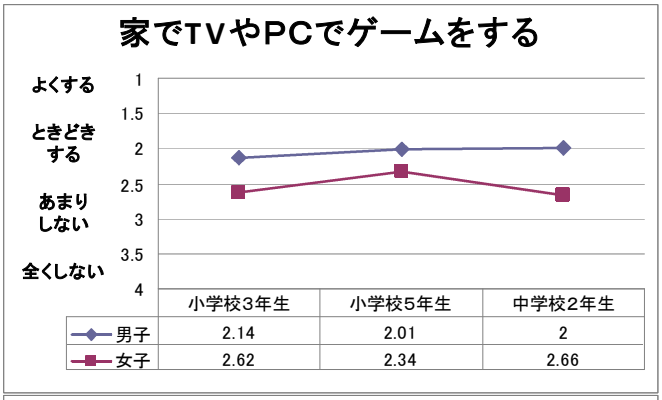
一方、「映画や買い物に町中へ出かける」という質問項目では、小学校５年生と中学校２年生で男女間において、有意差が見られた。男子は小学校３年生から中学校２年生までほぼ横ばいに比べ、女子は小学校高学年以降、映画や買い物に町中へ出かけることは、男子に比べると増加傾向にある。行き場所は、小学校５年生では、町田や相模大野が多く、中学校２年生になると橋本までエリアが広がる。この３箇所のいずれでも男女間に有意差が見られた。

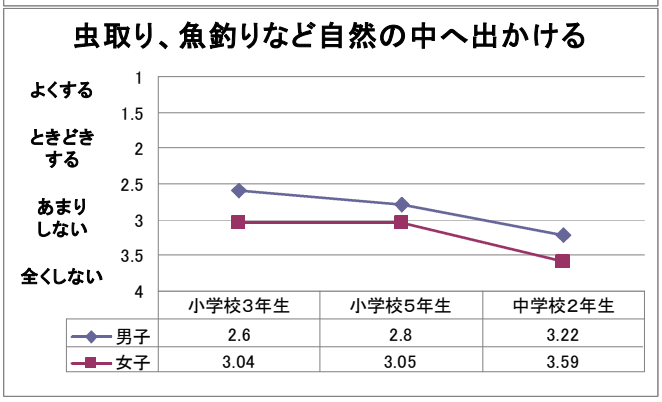
家でテレビやコンピュータでゲームをする子どもは、どの学年でも男女間に有意差が見られた。男子の方が、家でゲームをする傾向はあるが、男女とも平均値は「２」を超えるものの、「ときどきする」にとどまり、頻繁に家にこもってゲームをするまではいえそうもない。

虫取りや魚釣りなど自然の中へ出かける子どもは、どの学年でも男女間に有意差が見られた。男子の方が女子に比べ、自然の中へ出かけるが、学年が上がるにつれて、男女とも減少傾向にある。









※　グラフの数値はいずれも平均値

Ⅳ,「ほしい物があっても我慢する子ども」に関する分析

ほしい物があっても我慢したことが「Ａ群：よくある」「Ｂ群：少しある・ない」の二群に分け因子を活用し因子間のＴ検定※及びクロス集計を行った。※Ｔ検定(二つの平均間の相関を検定する方法)

○次の各因子に有意差が見られ、「人へ生死体験」「休日退屈」は有意差が見られず。

各質問をまとめた因子	平均値 A		B	有意確率	コメント
野外動的体験	2.04	＜	2.13	.000	①
野外静的体験	1.91	＜	2.07	.000	②
生活技能体験	1.53	＜	1.64	.000	③
生物の生死体験	1.29	＜	1.38	.000	④
相互励まし相談	1.77	＜	1.97	.000	⑤
挨拶声かけ	1.48	＜	1.66	.000	⑥
仲間はずれ喧嘩	2.21	＜	2.30	.000	⑦
感情の揺れ	1.73	＜	1.95	.000	⑧
耐性	1.55	＜	1.84	.000	⑨
文化静的体験	2.06	＜	2.20	.000	⑩
文化動的体験	2.14	＜	2.31	.000	⑪
将来挑戦忍耐協調	1.69	＜	1.86	.000	⑫
将来夢職業	1.81	＜	1.91	.000	⑬
休日室内	2.10	＞	2.01	.029	⑭
休日屋外	2.42	＜	2.52	.001	⑮
休日充実	2.34	＜	2.48	.000	⑯

$p < 0.05$ で有意差あり

※平均値の見方

回答者は、よくあるを「１」、少しあるを「２」、ないを「３」を選択している。したがって、数値が低ければ肯定していることになり、「そのような行動をよくしている」ということになる。

ほしい物があっても必ず我慢する子は、　（コメント（①～⑯）について）

① 木登りをしたり、真っ暗になるまで外で遊ぶなど、野外での体験活動をしている。
② 太陽の昇り、沈みや星空を見たり、山に登っている。
③ リンゴの皮むき、卵割り、鉛筆をナイフで削ることができる。
④ 生き物が子ども、卵を産んだり、生き物が実際に死んだところを見ている。
⑤ 相談相手になったり、友だちを励ましたりしている。
⑥ ボランティアをしている。お年寄りと遊んだり、周囲の人にあいさつをしたりしている。
⑦ とっくみあいの喧嘩をしたり、仲間はずれにされている
⑧ 怖い思いをしている。ワクワクして夜も眠れない。約束を破られ、悲しい思いをした経験がある。

⑨　何かに取り組んで苦しかったけど、最後までやり抜く。スポーツなどに負けて悔しい思いをした経験あり。
⑩　コンサートやプラネタリウム、外国に行く。ピアノを弾くことができる。図書館で本を借りている。
⑪　おみこしをかついだり、子ども会・育成会の行事に参加している。
⑫　やりかけたことは最後まで頑張り、苦しいことにも挑戦する。誰とでも仲良くできる。
⑬　将来、自分の夢が叶い、好きな職業に就けると思っている。
⑭　土・日曜日に家でテレビゲームやコンピュータゲームをしていない。
⑮　土・日曜日に虫取り、魚釣りなど自然の中に出かける。
⑯　もっと友だちと遊び、土日曜日には学校や家でできない体験をしたいと思っている。

ほしいものがあっても我慢したことが「よくある」をＡ群、「少しある」「ない」をＢ群として、分析を行っている。したがって、この分析では、少しくらい我慢したのでは、我慢したうちに含まれないことになる。

ほとんどの項目で有意差があり、「ほしいものがあっても我慢する子」は野外体験が豊かで、将来も自分の夢が叶い、好きな職業に就けると思うなど前向きな考え方をもっており、日常生活でも良い人間関係を築いていることになる。

ここでは記載していないが、「よくある」「少しある」をＡ群、「ない」をＢ群として、因子分析を行った。すなわち、我慢をしたことが少しでもある子をＡ群、全くしたことがない子をＢ群として分けた場合である。「仲間はずれ喧嘩群」の平均値は、「Ａ 2.25、Ｂ 2.10」となり、表２のＡとＢの数値の大小が逆となった。すなわち、ほしいものがあったとき「必ず我慢する子」も「全く我慢しない子」も仲間はずれの経験があるという結果となる。

まとめにかえて

昭和６３年以降、「さがみはらの子どもの生活体験調査」を５年ごとに行っている。「相模原市内の子どもはこの５年、１０年間にどのように変容したのだろうか、他の地域の子どもと比べ、どのような特徴があるのだろう」ということには、誰もが興味・関心を持つであろう。今回は、因子分析や分散分析、Ｔ検定、カイ二乗検定などを使い、過去のデータと比較して、子どもたちの経年変化を中心に分析した。

今回の調査・分析で、「山に登った経験がない」「川や海で遊んだことがない」「真っ暗になるまで外で遊んだことがない」「友だちと秘密の場所をつくって遊んだことがない」と答えた子どもは増加していることが明らかになった。ゲーム機などの普及の影響もあるだろうが、子どもたちの「日頃の遊び方」は、５年前、あるいは１０年前以前と比べ、大きく異なってきているのではないだろうか。すなわち、自然体験が少なく、学校から家に帰っても友だちとほとんど遊ばない子どもたちは、増加傾向にあるのではないかと思われる。

また、最近「コミュニケーションをとれない子どもたちが増えている」と言われている。コミュニケーションの力が不足していると、友だちとうまく付き合えなかったり、一緒に楽しく遊ぶことができない。あるいは、相手の気持ちをうまく理解できないということが生じてくる。家族そろって食事をしない家庭も増えていることも、今回の調査で明らかになった。このことから、親子の会話は少なくなっているのではないかということが懸念される。現状の環境のまま推移していくと、年を追うごとに、子どもたちは人と接し、会話をすることが減っていき、人間関係がますます希薄になっていくことが予想される。

この冊子の後半でも述べたが、自然体験が豊富な子どもたちは、「耐性力が高く、コミュニケーション能力や道徳観が充実し、将来に対する夢や希望をもっている」という分析結果が出ている。すなわち、自然体験を多く経験させることは、「子どもたちの人格や周囲の人間関係、生活環境にプラスの作用を働きかける」ということになる。『自然体験を多く与えること』が、人間形成においてとても重要であるかを改めて確認するに至った。

最後になりましたが、本調査の分析結果が、市内子どもたちの生活実態を把握するために、少しでもお役に立てていただければ幸いです。お忙しい中、アンケート調査にご協力いただいた市内小・中学校の児童・生徒のみなさん、および職員の方々に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

平成２２年３月３１日